宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像像
〒811-3505 福岡県宗像郡玄海町
電話 (0940－62－1311代)
http://www.munakata-taisha.or.jp/
定価 一年送料共 1000円

秋季大祭斎行

四百隻余が勇壮にみあれ祭

秋季大祭（田島放生会）は一日の朝に俄雨が降った後は、三日間とも天候に恵まれ、平日にも関わらず連日多くの参拝者で賑わいました。特に夕刻からは、多くの参拝者で大駐車場は満車状態。周辺道路は渋滞し、三日間で約十一万人の参拝者が訪れました。

九月三十日

宵宮祭

全神職参籠し、夕暮れの午後六時より宵宮祭を斎行し、いよいよ始まる当大社最大神事秋季大祭の無事斎行を祈念した。

十月一日

海上神幸「みあれ祭」

午前八時過ぎより、激しく雨が降り出し、「みあれ祭」が無事斎行されるか心配されたが、中津宮で出御祭が斎行される頃には天候回復し、大島小学校鼓笛隊を先頭に沖・中両宮の御神璽を奉安した神輿が大島港に到着。港の内外には「波切り御幣」「紅白の吹流し」「大漁旗」で飾り、宗像七浦より参集した漁船約四百隻が待機。

午前九時三十分、沖・中両宮の神輿が御座船に遷されると、合図の花火が打ち上げられ出港。二隻の先導船、二隻の御座船、お供する供奉船の大船団は幾筋もの航跡を残しながら進んだ。

一方その頃、玄海町田島の辺津宮でも出御祭が斎行され、辺津宮御神璽が沖・中両宮の御神璽の到着する神湊港へと出御された。

大船団は順調に海上を御神幸。神湊港入港間近かになると、供奉してきた船団は、順次御座船を拝し、各港へと帰っていった。午前十時三十分、予定通り沖・中両宮の御座船は神湊港に無事到着。みあれ祭は滞りなく終了した。

〈中津宮御座船〉
大島・第一春日丸
（船長＝佐藤隆二氏）
〈中津宮先導船〉
神湊・安徳丸
（船長＝川西勝利氏）
〈沖津宮御座船〉
鐘崎・第十八蛭子丸
（船長＝入江清二氏）
〈沖津宮先導船〉
津屋崎・玄洋丸
（船長＝赤間幸明氏）

陸上神幸

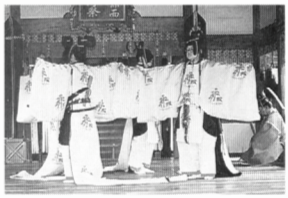
一年振りにお揃いになられた宗像三宮の神輿は、玄海魚市場でお祓いの後、白衣・白袴にハチマキ姿の奉仕者に担がれて御旅所である「頓宮」まで陸上神幸。頓宮祭を斎行し、御座船奉仕車に感謝状が贈呈された。

その後三宮の神輿は宗像警察署の白バイ・パトカー、宗像交通安全協会広報車に先導され、御座車で辺津宮まで陸上神幸し、正午前無事に入御された。

〈御座車〉
・株式会社新出光
・宗像地区タクシー協会
・玄海町観光協会
〈先導車〉
・玄海ホテル旅館組合
・宗像地区交通安全協会
〈供奉車〉
・玄海町消防団
第一・四分団
・玄海ホテル旅館組合

一日祭（入御祭）

「主基地方風俗舞」



辺津宮に入御されて直ちに一日祭を斎行。保存会々員の奉仕で主基地方風俗舞が奉納された。

正式には「大嘗祭主基地方風俗舞」と呼ぶ。「大嘗祭」とは歴代天皇が御即位される一世一代の最大祭儀。「主基地方」とは、この大嘗祭に際し奉献する新穀をつくるための斎田を、京都を中心に東方「悠紀地方」、西方「主基地方」から選定される。

昭和天皇御即位の昭和三年、福岡県早良郡脇山村（現＝福岡市早良区脇山）が主基斎田とされた。その時たった一度だけ舞われたのが、この主基地方風俗舞である。しかも門外不出を原則とし、大嘗祭が終った後は一度たりとも奏されることはなかった。

しかし脇山村の産土神が「横山神社」という当大社の分祭祀社であった関係上、この記念すべき神楽舞を後世に伝えるべく、特別の思召しを以って宮内省より、当大社に御下賜いただいた。

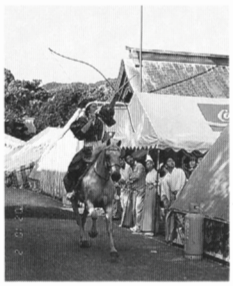
ちなみに今上陛下の大嘗祭では大分県が主基地方に選定され、やはり主基地方風俗舞が奉納されたが、全国で唯一伝承保存されてのは当大社のみである。

一日祭で奉仕いただいた保存会々会員は次の通りです。（敬称略）

〈舞方〉
吉武倫彦
中野武和
清水陽介
深田龍介
〈歌方〉
石津典秀
中野修
中野正徳
吉田敏幸
中山真清
永島卓爾

十月二日

「流鏑馬神事」



南北朝時代の正中年間よりの歴史をもつ流鏑馬神事が、二日目の朝午前八時より宮木貞彦氏らにより奉納された。

射手が烏帽子と直垂姿に威儀を正し、本殿で命名式の後、神馬はお祓いを受け、神門前に設けられた馬場道を三頭が疾走。地上七メートルの的に向けて、次々と矢を射ると拝観者から盛んな拍手が起こっていた。

その年の豊作を占うと共に、矢は災難消除のお守りになると言われている。

御奉仕いただいた射手の方は次の通りです。（敬称略）

宮木光広
宮木敏己
木稲修一

二日祭

「翁舞」

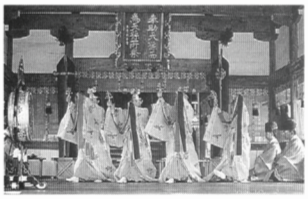
二日祭では福岡市の喜多流（梅津忠弘氏門下）社中の奉仕により、能管や鼓の鳴り物に合わせ「翁舞」が神前に奉納された。この舞は古くから延命招福の御利益が有名で、一目見ようと詰めかけた多くの参拝者は、風雅な舞にしばし見入っていた。

この時につけられる室町時代作の「翁面」は沈鐘伝説をもつ。今から約五〇〇年前の明応八年（一四九九）、時の大宮司宗像氏国が鐘の岬（現＝玄海町鐘崎）の海中に沈んでいる大鐘を引き揚げようとすると、突然大時化となり引き揚げを断念した。すると海は忽ち鏡のように穏やかになり、そのしずかな海面に翁の面が浮かびあがったという。この面を龍神から授かったものと、当大社の本殿に奉安し、以来神宝とされている。

十月三日

三日祭

「浦安舞」



大祭三日祭では地元玄海中学二年生の女生徒四名の奉仕で浦安舞が奉納された。緊張した面持ちで十二単を着装し、檜扇と鈴を手に舞う姿は、拝殿に詰めかけた多くの参拝者を魅了した。

浦安舞は昭和天皇の御製を皇紀二六〇〇年（昭和十六年）奉祝の際「祭祀舞」として制定され、以来全国津々浦々の神社で舞われている。当大社では小・中祭では巫女が、春秋大祭時には玄海中学校の女子に奉納いただいている。

昨年、同中文化祭で同生徒による浦安舞が、全校生徒・先生・保護者の前で舞われたが、今年も十月三十日の「学習発表会」で舞う予定になっている。

御奉仕いただいた舞姫は次の通り。

楠葉摘
中野亜美
松崎綾
大村あゆみ

「南坊流献茶祭」

午後二時からは南坊流滝口社中奉仕による献茶祭が斎行された。

祝詞奏上後、拝殿で南坊流二代洗心庵瀧口宗芳氏によって御点前が披露されると、参拝者は固唾を飲んで見守った。しばしの静寂の後、濃茶がたてられると神職が御神前にお供えし、約一時間の祭典は終了した。

南坊流は表千家・裏千家といった家元をもたない流派で、千利休の高弟により開流されたと云う。

尚、当大社巫女も、毎週一回南坊流小方社中により指導を受けている。

神具・装束
結婚式場用品
株式会社
会社 井筒
福岡店 福岡市博多区東公園一一三（〒812-0045）
電話 福岡（九二）六五一－九四五六番
本店 京都市下京区油小路六条北入（〒600-8231）
電話 京都（〇七五）三四一－三三四一（代）～四番
京都（〇七五）三四一－三三四一番

木組の家
匠の技
総合建設業 株式会社 玄江組
事務所 〒811-3406 福岡県宗像市大字稲元一〇二五
電話（〇九四〇）三二一二五六七

余滴

政府の広域行政推進を受け、全国で市町村の合併が進む中、宗像市と玄海町が合併し、平成十五年四月一日より新「宗像市」が誕生する。現宗像市は昭和五十六年、宗像郡五町村のうち宗像町が、単独で市制を施行し発足した。

元来宗像地区は、古来より「神郡宗像」と称されているように、文化・経済的また地性的にも、宗像大社を核とした地域で、有史以来連綿としてその伝統を受け継いできている。その領域は遠賀郡、鞍手郡、糟屋郡の一部をも含む広範なものであった。

大島村は、数年後に新「宗像市」と合併の意向である。一方福間町と津屋崎町の合併を推進させようと、住民運動が展開され両町の行政は検討を余儀なくされた。新「宗像市」の合併協議会も、両町に大同団結を訴えてはいるが、この合併がどのような方向に向かうかは予断を許さない。

合併は、行政規模や利害関係等の思惑だけで進めては、大きな禍根を残す。宗像には宗像の歴史がある。地域の歴史、伝統をないがしろにした行政区分は、却って住民の反発を招くし、ある意味では先祖への冒瀆である。

むしろ歴史的背景を鑑みると、現宗像市郡はもとより周辺地域を視野に含んだ、広域行政の検討も必要ではないだろうか。〈M・T〉

天宮神社一行参拝
舞楽奉納（国指定重要無形民俗文化財）

十月十三日（日）静岡県から天宮神社河合次郎宮司ら三十六名が来社、正式参拝し、記念植樹を行った。

天宮神社は静岡県周知郡森町天宮に鎮座され、旧社格は県社で、静岡県内でも由緒のある御社。

今から約一五〇〇年前の欽明天皇の御代、当大社の御祭神（宗像三女神）を勧請し、今回本宮である当大社への参拝となった。

参拝に先立ち心字池横で天宮神社の御神木である「竹相」の木が、天宮神社河合宮司、当大社神島権宮司らの手により植樹された。

午前十時三十分から、本殿で正式参拝。続いて天宮神社の大祭に奉納される十二段舞楽（国指定重要無形民俗文化財）の内「延舞」「太平楽」「納曾利」「獅子」の四段が奉納された。

日曜日であったことや事前に報道もあったためか、本殿の周りには約三百人程が詰め掛け舞楽に魅入った。

この舞楽は今から約一三〇〇年程前の慶雲二年（七〇五年）、京から藤原綾足が神職として着任し、延舞、色香、庭胡蝶、鳥名、太平楽、新靺鞨、安摩、二の舞、陵王、抜頭、納曽利、獅子の十二段舞楽を奉納したのがはじまりと言い伝えられている。宮中等で舞われる一般にいわれる「舞楽」とは異なり、時代の経過と共に変遷し、現在は九州でいう「神楽」に近いものになっている。

参拝後の直会で舞楽保存会の鈴木会長は「五十年前に参拝した記録が残っているが、長年の夢が叶い充実感でいっぱいです。次は三年後に。」とすでに次の参拝に向けての意欲を語られた。

立正佼成会
庭野日鑛会長参拝

九月二十七日、立正佼成会庭野日鑛会長・同夫人らが当大社に正式参拝した。

今回庭野会長は、立正佼成会古賀新道場入仏・落慶式典出席の為来福。当大社参拝の運びとなった。

当日、会長御到着の一時間前から、福岡県内の信者ら約二百人が神門前を埋め尽くし、御到着を今か今かと待ち構えた。

午後二時三〇分予定通り会長御到着。神島権宮司らが出迎え、勅使館に入られた。太田宮司と歓談の後、記帳を終えて勅使館前に列立。たくさんの信者が見守る中、神職に先導され本殿へと参進、拝殿に昇殿され正式参拝。二礼二拍手一礼の所謂神道形式の作法で、宗像大神に敬虔な祈りを捧げられた。

その後、高宮斎場・神宝館にも足を運ばれた。日本人の生活習慣から生まれ、仏教の影響も大きく受けた「神道」、そして日本の古代祭祀の物証ともいえる「沖ノ島」の遺跡出土品に関心を示され、太田宮司の説明に興味深げに聞き入られていた。

〈立正佼成会〉

昭和十三年三月五日現会長日鑛氏の御尊父庭野日敬氏（開祖）・長沼妙佼氏（脇祖）によって法華三部経を所依の経典とし創立。

釈尊の教えを生かし、宗教界の様々な各宗教と手をたずさえて平和な世界を築こうとする在家仏教教団。

約二百十一万世帯（平成十三年十二月三十一日まで）の信者がいる。

七五三祭の御案内

毎年十一月十五日に数え年三才の男女、五才の男児、七才の女児をつれて神社に参拝し、今日までの無事発育を感謝し、更に将来の成長を祈願するお祭りです。

昔は三才の男女は髪置、五才の男児は袴着、七才の女子は紐解きの祝いが行われていました。

この我国古来の慣習を今日に伝えるのが、七五三祭りです。

当大社でも、お子様の健やかな成長と幸せを御奉告する、恒例の「七五三まつり」を、本年も左記により盛大に執り行いますので、皆様お誘い合わせの上御参拝下さいます様ご案内申し上げます。

記

期　間　十月十九日（土）～十一月二十四日（日）

（尚、この時期以外でも、おまつりは行っております。）

初穂料　一件（一人）三、〇〇〇円

一名増すごとに、二、〇〇〇円の追加となります。

授与品　御祈願お申し込みのお子様には、お守り、千歳飴、御幣等を授与いたします。

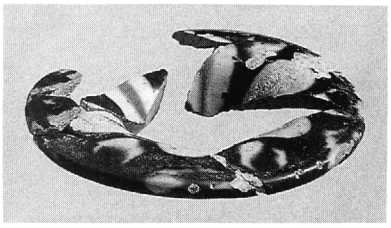
大社の神宝⑦
唐三彩長頸瓶片

昭和四十四年十月、三笠宮殿下が沖ノ島へ来島されたその日に、沖ノ島五号祭祀遺跡より非常に注目すべき発見があった。合計十八片の唐三彩の破片が、遺跡全域に渡り散布した状態で出土したのである。さらに、これらが昭和二十九年八月の調査の際に沖ノ島七号遺跡より出土した五片の三彩陶器と同一の個体であることが判明したのである。

五号遺跡で発見の唐三彩片は、口縁部七片と胴部の貼付装飾部九片と底部とみられる二片とに分けられる。口縁部にあたる七片と七号遺跡の四片とを接合すると、朝顔形に開いた口縁部を復元し得る。口径約八・六センチ、口縁端部の厚さは〇・四センチで頸部に向かうにつれて厚みが増している。施釉はところどころ剥落しているが、内外面ともに緑を基調とし、内面は白釉を用いて六花弁文・鹿の子文を表わし、花弁中央は黄釉で装飾している。外面には文様はみられない。

胴部から剥がれ落ちた九個の小片は器の胴部を飾るメダイヨンで、宝相華文と葡萄文の一部と考えられる。このメダイヨンの文様により、沖ノ島出土唐三彩片の当初の器形は、東京国立博物館の「横河コレクション」中のものと同じ唐三彩長頸瓶といえる。

横河コレクションの唐三彩長頸瓶は、高さ二十五・三センチ、口径七・五センチ、底径八・八センチを計る。白色の胎土の上に白・緑・黄褐色の三彩釉がかかっており、肩と胴部下方には葉状の房文様、胴部には縦菱形の宝相華文のメダイヨンを四個ずつ配している。



写真は当社神宝唐三彩長頸瓶片の口縁部

唐三彩とは中国盛唐時代の多彩釉陶器をさす。現在のところ、西安・洛陽を中心に出土している。

その窯址としては河南省鞏県・密県・登封県などがある。この地域で製作された唐三彩は水運などで洛陽や西安に運ばれ、そのうちの長頸瓶・三足鍑などの小形の器物が遠路へ或いは海外へと運ばれたのである。沖ノ島出土のものも良質白色の胎土であることから、河南省古窯での製作である可能性が高い。

我国における唐三彩の出土例は、畿内や福岡を中心に二〇数カ所にのぼり、多くが祭祀遺跡や寺院に関連している。完形品はなく全てが破片であり、壷・鍑・小碗・合子などの器物に限られている。長頸瓶の出土例は沖ノ島が唯一である。

出土例として圧倒的に占めるものは三彩枕である。そのうち奈良市大安寺の講堂址からは三〇個体分以上の陶枕が出土した。大安寺は僧の道慈が藤原京にあった大官大寺を平城京へと遷造したものである。『続日本紀』によると、道慈は大宝二年（七〇二）に派遣された第七次遣唐使に従って入唐し、養老元年（七一七）に派遣された第八次遣唐使らと共に養老二年（七一八）に帰着した後、大安寺を遷造したという。つまり、発見された唐三彩枕は、彼の帰国の際に持ち込まれ、後の講堂焼亡の際に土中したものと考えられる。同様に、我国出土の他の唐三彩も、八世紀前半代に派遣された遣唐使らによってもたらされたものであるといえよう。

沖ノ島五号遺跡は七世紀後半から八世紀前半代の祭祀跡である。従って、この時期の祭祀遺跡より出土した当社の唐三彩長頸瓶片もまた、前述の如く遣唐使により我国へもたらされ奉献された公算が高いというべきであろう。

〔ご案内〕

晩秋を飾る神賑い

第三十二回 西日本菊花大会

神郡宗像に菊の季節が到来しました。九州各県を中心に、全国の菊花愛好家が丹精込めて作り上げた銘花約三千五百鉢が、境内の特設会場に展示されます。この大会の最高賞は内閣総理大臣賞、この他に大臣賞が十一本授与され、別名「菊作り九州ナンバーワン決戦大会」とも呼ばれています。

期間中の境内は、観菊者、七五三の家族連れなどで賑います。また菊苗・菊鉢の販売、地元玄界の海の幸、抹茶コーナー、参拝記念品が当たる「菊みくじ」などの楽しい催しも行われています。

是非、御参拝下さいますよう御案内申し上げます

期　間　十一月一～二十三日
会　場　宗像大社境内
表彰式　十一月十七日　午前十時
於＝アクシス玄海
拝観料　無料
駐車場　無料

――◇――◇――

第十五回 宗像大社刀剣展

菊と刀といえば、古来より日本の象徴であったように、日本人の心を強く惹きつける魅力があります。

当大社ゆかりの刀を中心に、崇敬者の方々の御協力のもと、鎌倉時代から現代までの刀剣類を展示いたします。

期　間　十一月一日(金)～二十三日
時　間　午前九時～午後四時半
会　場　宗像大社神宝館一階
拝観料
大　人……三〇〇円
高・大学生…二〇〇円
小　人……一〇〇円

――◇――◇――

第二十七回 奉納吟剣詩舞道大会

熊本市に本部を置く青香吟社宝山会々員約七十名が、御神前に「詩吟」「剣舞」を奉納。日頃練磨した吟剣詩舞道大会が開催されます。

期　日　十一月三日　午前九時半～
会　場　宗像大社清明殿

――◇――◇――

第三十一回 献詠短歌大会

福岡県内を中心に、各地の短歌愛好家から沢山の詠草が寄せられ、著名な斯界指導者の先生方を選者としてお招きし、講評・指導を受けます。

本年は宮柊二の研究で著名で、粕屋郡宇美町御在住の木原昭三先生をお招きして、「宮柊二の歌」について講演していただきます。

期　日　十一月九日(土)　午前十時～
会　場　宗像大社清明殿

秋の交通安全キャンペーン

今年も秋の交通安全県民運動（九月二十一～三十日）で、当地宗像でも九月二十五日午後三時より、宗像市三郎丸で街頭キャンペーンを行った。

当日は爽やかな秋晴れの天候に恵まれ、当大社からは神職・巫女が出向。宗像警察署、宗像交通安全協会や、市・郡内諸関係団体の皆様と一緒に約四十人が参加した。

キャンペーンに先立ち、宗像警察署中垣交通課長が挨拶、今回の重点項目に「高齢者の交通事故を防止しよう」、「シートベルトとチャイルドシートの着用を徹底しよう」、「交差点の事故を防止しよう」の三点をあげ、ドライバーに訴えることを申し合わせた。

一時間にわたる街頭キャンペーンでは、ほとんどのドライバーがシートベルトを着用しており、感心した。

しかし今年の宗像警察署管轄域における交通事故死亡者は、すでに十一人と昨年のこの時期の七人に対し大幅に増加しており、その内の半数以上の方がシートベルトを着用されていなかったようである。

このキャンペーンが少しでも交通事故の防止・解消に役立つことを切に願った。

決断力

その時昭和の経営者たちは

出光興産株式会社　出光佐三店主

「ゼロからの再出発」②

〈6〉

瀧口凡夫

廃墟に屹立する巌の如く

佐三の姿は荒廃に屹立する巨岩のように見える。

敗戦で廃墟し、打ちのめされた人たちが茫然としているときに、ひとり立ちあがって歴史を見直せ、自信を持て、いまから再建にかかれ、と叱咤激励するのである。

この時期、戦後の日本がどのような国になるのか、天皇制の存廃もいわゆる国体の護持も、ましてや産業や経済がどうなるのか、皆目わかっていなかった。すべては連合国軍総司令部（GHQ）の意向にかかっていた。

「僕は変人扱いされてね」と、佐三はのちに語っている。なぜ佐三は三ヶ月も続けて、一般の意表をつく発言をしたのであろうか。

第一は、日本の歴史にたいする確信である。佐三は「三千年の歴史を見直して、その偉大なる積極的国民性と、広大無辺の抱擁力と、恐るべき咀嚼（＝かみ砕く）力とを強く信じ」と書いている。

中国から渡来した仏教、儒教などの文化、芸術を取り入れて自分のものとし、元寇（元軍の襲来）も挙国一致でこれをしりぞけた。中国は宗教、芸術の先進国だが、日本がこれを抱きとり発達させた。すばらしい能力を持った国体であり、敗戦で悲観する必要はまったくない。佐三はそう言うのである。

明治時代に青年期を生き、宗像大社の氏子として育ったものの気骨と信念が感じられる。

焦土に立つ出光本社（写真中央に）

第二は「事変の目的は完全に達成されている」との認識である。

佐三によると「事変（注、日支事変―太平洋戦争を指す）の真の目標は国体の護持と日本精神の強化」にあった。

このうち「国体の護持」は、天皇（皇室）を中心に先に述べた国民性、力を発揮すること、と解してよいであろう。

「日本精神の強化」には、佐三独得の見方がある。

学生のころから、金権万能の風潮にたいする反発があったことは、すでにふれたとおりである。

この風潮は、第一次世界大戦への参入によって、日本が戦争景気にわき、ドイツが中国領内に持っていた利権や南方諸島を肩代わり領有し、佐三がいう「濡れ手に粟のつかみどり」をしたことで、一挙に加速した。

しかし、事変の進展によって、国民は「安逸がいかに人を殺し、国を誤るかを知り、艱難汝を玉にすの名言の重さを改めてかみしめる」ことができた。さらに、苛烈なる戦局は特攻隊精神さえ生んだ。

これ以上、何を求めんとするのか、と佐三はいう。

第三は、佐三自信が創業以来ただひと筋に追い求め、体系化してきた理念と、これの具体化としての事業の成果、にたいする自身であろう。

佐三は「玉音を拝して」の末尾で「事業そのものは近く消え失せる運命にある。惜しい思いがする」と書いているが、心中には再起への強い決意が秘められていた。

第四九六回 宗像大社歌会詠草

大野展男　選　毎月25日〆切

日の里　石松　弘次
祖父と父と商ひ違へど炭坑に関はり生きし一生と思ふ

（評）エネルギー革命で滅び去ったのは炭坑だけではない。そこに生活していたすべての人達の生活をも滅びさせたのである。哀感を越えた祖父と父への追悼のうたである。結句の「思ふ」は、古代は喪に服す、追悼するの意味があった。

日の里　佐藤　純一
み社の傍に立ちをる病院は恩恵ありや摩利支と名づく

（評）摩利支は摩利支天のことで、昔は武士の守り本尊とされた女神、その名にあやかった病院を「恩恵ありや」と詠う作者の知慧は深い。

光　岡　河村　久光
日によりて季節によりて雲の色雲のかたちのちがふがたのし

（評）雲を通して自然の変化に限りない親しみを覚え、自然と共に生きる自分をひそかに体感しているのだろう。韻を踏んだ下句のひびきは、作者の体感を倍増させて、こころよい。

福　間　池浦千鶴子
今どきの若者の中立つ吾の背丈は低し走る電車に

（評）「今どきの」の語は一見、唐突のようだが、若者に対する羨望と非難とが入り交ってをり、それが四句、五句の「背丈は低し走る電車に」を、みちびき出してをり、一種の心理詠となり、なかなか面白い一首である。

日の里　石松　知子
夕立のすぎてひかりのとどく庭サルスベリの白花房ゆらす

（評）白サルスベリの花房に雨あとの夕光がとどいている。幻想的なそして如何にも日本的風景である。かかる時作者も、歌を鑑賞する吾々も自然との一体感に浸ることが出来るのである。描写力に注目したい。

吉　留　高山　信子
ふたたびのいのちを得たり新しく生きむ米寿となりたる今を

田　野　森　甲子
秋野菜の蒔き季なれど乾く畑はふも雨降る気配のあらず

田　野　森　つるの
苺植ゑの時期迫れども雨降らず空に向ひて雨乞ひをする

朝　野　藤井　浩子
多種機能付きたる電話購へど使へずをりぬ老の二人は

神　湊　中山　千鶴
目覚むれば今日の予定をたしかめる世に棲む日々のこのくり返し

武　丸　中村さつき
交流会九十歳のひとと吾袴姿で舞台に踊る

鐘　崎　安永　久子
何信じなにに頼れる今の世か泥にまみるる企業も官も

名古屋　小田　留子
きょうだいは共に争ひ育ちきて静かに話す歳となりゆく

名古屋　小田　喜一
待ちわびし秋の気配の漂ふか清しき朝に肌は覚めをり

八幡東区　永田久美子
郷土史の受講で知りし世の移り帰路改めて城を見上げる

津屋崎　佐々木和彦
鬼やんまスーパーの床すれすれに飛びつつ出口を求めてゐたり

福　間　香月　照子
チロチロと首輪の鈴をならしてたあの日の猫は逝きてかへらず

日の里　大和美由紀
古宮を巡れば床下に擂鉢の形を作る蟻地獄あり

自由ケ丘　細川絹子
今朝掃きし庭に散り敷く柿落葉赤き葉もあり虫しくいもあり

福　間　中村　勇
小屋の屋根覆ふ南瓜は枯れ初め末成り一つ風にゆれをる

池　田　小田　イセ
床漬の色よき茄子を卓に盛る子もすきなるか黙し食べをり

宗像大社歌会
俳句作品集（四七一）

福間　森　清

戸を繰れば朝涼来たる九月かな

光岡　井上　嘉治

鈴虫の声満月に併せり

自由ケ丘　細川　絹子

今掃きし庭に早やちる柿落葉

東郷　田中　憲象

毬栗も道に被ればしばかるる

日の里　花田いつ枝

沖晴れて二百十日の鳶舞ふ

光岡　井上　嘉治

彼岸花稲の緑と競い合い

東郷　吉武　湧泉

口うつし習ひ唄ふや夕焼野

東郷　吉田　杏子

終戦のあの日もカンナ燃えてゐし

東郷　三浦美千代

夢ひとつ雲に托して夏去りぬ

東郷　田中　雨葉

通信待つ三分停車秋の雲

東郷　木原　房子

平凡といふ倖や芙蓉咲く

（続）浜の寄物 171
いしいただし

漂着物学会

昨年十一月二十四日に、漂着物学会を立ち上げた。海や漂着物に関心がある六人で呼びかけ同士を募った。全国から約三十人が、高知県幡多郡大方町の砂浜美術館に集まり、会を結成、第二回総会は今月十一月十六日・十七日に福岡大会が決定した。

福岡大会は、私が勤めている古賀市立歴史資料館が会場となる。

十六日（土）総会・講演・研究会、十七日は玄海町神湊スカイホテルト下の勝浦浜でビーチコーミング、終わって宗像大社、神宝館、鎮国寺、鐘崎民俗資料館、織幡神社を巡る。

十六日の総会は一時から、総会終了二時半から講演、研究発表等である講演は東京大学海洋研究所の道田豊氏で演題は「漂着物を運ぶ海流のはなし」。研究発表は鹿児島県大学の藤枝繁氏の「鹿児島の漂着物ライター」。クリーンアップ全国事務局の小島あずさ氏の漂着散乱ゴミ」。ウキウキ研究会の林重雄氏から「漂着浮子」。京都府の東山高校地理部のクラブ活動として研究してきた「琴引浜を定点とした漂着物の長期間にわたる調査について」。福岡県糟屋郡新宮町の相島小学校の取組み「相島の漂着物」を予定している。総会が終了後の講演は一般も聴講ができる。

また七日から十七日まで資料館ギャラリーでは福岡大会特別漂着物展を行う。玄界沿岸に漂着したココヤシ約七〇〇点、遠賀郡岡垣浜漂着のラクン製丸木舟、福岡市志賀島漂着のベトナム製竹籠舟、五島・福江島漂着の南方系櫂。福岡市比恵遺跡出土の弥生時代のヤシ製容器、大野城市・中・寺尾遺跡のヤシ状壷形土器。

会場のサンフレアこが

二科会の池田正臣氏の「漂着絵画」三点、流木アートの田代恒雄氏の流木と陶磁片でつくったアート（五点）

開会時はオカリナ演奏の日嘉マリ子氏による長崎県・原ノ辻遺跡出土のヤシ笛（レプリカ）を吹奏、懇親会では池田正臣氏のフルートを予定している。

十七日のビーチコーミングは八時三十分から宿泊の神湊スカイホテルの勝浦浜で、約二キロを予定している。

漂着物の季節であり、ソデイカも多く漂着、思いがけない漂着物に出会えるかもしれない。

終了後、史跡巡りは宗像大社、・神宝館の沖ノ島出土物を、鎮国寺、海女のふるさと鐘崎の鐘崎民俗資料館、万葉と沈鐘伝説・織幡神社を案内する。ビーチコーミングは石井が、史跡の方は楠本氏。

漂着物も学会として会ができ、全国へと流れ出る。学会誌（まだ会報だが）どんぶらっこも四号となった。

話題の新車紹介 ㉗
トヨタ「プラド＆サーフ」

十月七日新型のランドクルーザー・プラドとハイラックス・サーフがフルモデルチェンジしました。

二車共通の新型プラットホームを使い、搭載されるエンジン、ミッション、サスペンション形式も同じ仕様となりました。しかし駆動方式やサスペンションの制御に個性をもたせることで、「本格4WDのプラド」「スタイリッシュSUVのサーフ」と性格を分けています。

〈プラド〉

ランドクルーザーファミリーのミッドレンジとなるプラドは、オフロードの走破性を進化させると同時に、オンロードの走破性もアップさせてきました。

ランドクルーザー・プラド

駆動系は新開発のフルタイム4WDを搭載し、センターデフにはトルク感応型トルセンLSDを採用。これにより瞬時に前後トルク配分を変えるスリップ制御による高いトランクション性能を得ました。

世界初の半導体式アクティブ車輪速センサーにより、急斜面を一定速度で下る、急斜面発進時のズリ落ちも緩和しています。

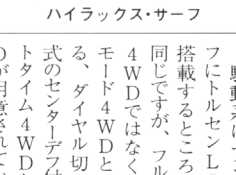
また車高を制御するリア電子制御エアサスペンションで、車両の安定性と快適性も追求しています。

搭載されるエンジンはV6三四〇〇・四気筒二七〇〇・四気筒三〇〇ターボディーゼルの三機種。勿論低排出ガスレベルをクリアさせています。

〈ハイラックス・サーフ〉

ハイラックス・サーフは、SUVムードをさらに盛り込んだスポーティーなスタイリングとなっています。

室内もこれまでの実用一点張りから、かなり洗練された都会派SUVのイメージに生まれ変わっています。


ハイラックス・サーフ

駆動系はセンターデフにトルセンLSDを搭載するところまでは同じですが、フルタイム4WDではなくマルチモード4WDと呼ばれる、ダイヤル切り替え式のセンターデフ付きパートタイム4WDと2WDが用意されています。

価格はプラドが二七七～四〇〇・六万円、ハイラックス・サーフが二三二～三四〇万円となっています。

両車とも実車を展示して、皆様の御来場を心よりお待ちしております。

～お問合せ先～

福岡トヨタ自動車（株）宗像店

☎（〇九四〇）三三一六七五五

宗像 沖ノ島シンポジウム
「海の正倉院・沖ノ島」
～いま甦る太古のロマン～の御案内

『宗像 沖ノ島』の歴史的価値と、宗像地域の魅力を再度見つめ直して、これからの地域活性化に役立てようと、「沖ノ島シンポジウム実行委員会」が組織され、これから諸活動を展開する事となりました。

〝海の正倉院〟といわれる沖ノ島は、玄界灘の真っ只中にある孤島です。この「神の島」から十二万点もの国宝・重要文化財が発見されています。

なぜ、このような絶海の孤島に、古代の宝庫が存在したのか、その謎に迫るシンポジウムです。

このように多くの国宝・重要文化財を保有する沖ノ島の文化遺産を、今日まで支えてきた宗像地域の歴史文化を再認識する事で、地域住民による教育文化の振興と、地域の活性化を目指し、その第一段階としてシンポジウムが開催されます。

将来「沖ノ島を歴史に残る世界遺産に！」という声が、地元を中心にあがってきています。

今回のシンポジウムは、宗像から世界への発信です。

沖ノ島に夢を乗せて、古代のロマンをいま、甦らせます。

一、名　称

「シンポジウム 海の正倉院・沖ノ島～いま甦る太古のロマン」

二、開催日時

平成十四年十一月十三日（水）

開場　午後六時

開演　午後六時三十分（九時終了予定）

三、会　場

宗像ユリックス・ハーモニーホール

四、主　催

沖ノ島シンポジウム実行委員会

五、入場料

無料（入場整理券方式）

六、申し込み方法

★十一月五日より同実行委員会（大島村役場・玄海町役場・宗像市役所）にて配布。

〈数に限りあり〉